

ンを得るための活動と自身の研究活動を継続することができた(その後、本学の特任 RF に着任し、さらに RPD に採用され、研究活動やキャリアを途絶えることなく継続することができた)。

【社会的評価】

- ・みがかずば研究員の取組が社会の女性リーダー育成に大きく貢献していることが評価され平成30年度東京都女性活躍推進大賞(教育部門)を受賞した。

<http://www.ocha.ac.jp/news/20190118.html>

- ・みがかずば研究員の活動が以下の通りテレビで紹介された。


東京サイト 『女性が輝く社会「女性研究者の支援」』 2019年2月21日(木)13:55～13:59

2019年2月21日(木)

◎「女性研究者の支援」

東京都女性活躍推進大賞を受賞したお茶の水女子大学。大学が行う「みがかずば研究員制度」は博士号を持つ女性研究者の継続的な研究活動や、中断した研究の再開を最長2年間支援する制度です。この制度を利用して2人の子どもを育てながら研究をしている花形さんは、子育てや研究、仕事と色々なことが両立できて助かっているそうです。

その他にお茶の水女子大学は2014年度からキャリアアップを目指す社会人女性を対象に、「お茶大女性ビジネスリーダー育成塾 徹音塾(きいんじゅく)」を開講し女性リーダーの育成にも力を入れています。



◎お茶の水女子大学
住所: 東京都文京区大塚2-1-1
電話: 03-5978-5336(男女共同参画推進担当)
HP: <http://www.ocha.ac.jp/>

(6-1-4 図2) 2019年2月21日(木)放送 東京サイトにおけるみがかずば研究員制度の紹介
(バックナンバー <https://www.tv-asahi.co.jp/t-site/bk/20190218/index.html> より抜粋)

※東京サイト 毎週月曜～金曜 午後1時55分からテレビ朝日にて放送。

<https://www.tv-asahi.co.jp/t-site/>

6-1-5 若手女性研究者支援

グローバルリーダーシップ研究所 特任講師 内藤 章江
同 特任リサーチフェロー 小濱 聖子

【趣旨】

若手女性研究者の研究力向上支援の一環として、シンポジウムや研究集会等を積極的に主催・運営する機会を増やすために、グローバルリーダーシップ研究所特別研究員(呼称:みがかず

ば研究員)を対象に学内公募を実施し、候補者を選出したのち、費用面での支援を行った。

なお、本支援事業は、昨年度は文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業(連携型)」(平成26-28年度)において行い、内容は上記事業の成果報告書に記載している。

(6-1-5 表1) 「若手女性研究者支援」実施内容

No.	実施日 開催場所	企画者名(所属) タイトル
1	2018年12月22日(土) お茶の水女子大学 大学本館3階306室	渡辺基子(認定遺伝カウンセラー、グローバルリーダーシップ研究所) 「子どもの親になること ダウン症のある子どもの父親から～子育てに関するメッセージ～」
2	2019年2月16日(土) お茶の水女子大学 文教育学部1号館3階302室	巽昌子(グローバルリーダーシップ研究所) 「『継承』の比較史 ―伝えられるモノと文化―」

【企画・主催した若手女性研究者からの報告】

1. 「子どもの親になること ダウン症のある子どもの父親から～子育てに関するメッセージ～」

報告者： 渡辺基子氏

1-1. 目的・意義

遺伝性疾患を有する子どもの親に関するこれまでの研究やシンポジウムは、主に母親が対象であった。本シンポジウムは父親に着目することで、遺伝性疾患を有する子どもの親の状況について両親という視点で理解し、支援と研究につなげることを目的とした。

1-2. 実施内容

- (1) 実施日： 2018年12月22日(土)13:00～17:20
- (2) 場所： お茶の水女子大学 大学本館306室
- (3) 参加者： 128名【学生23名、教職員7名、医療者22名、一般33名、当事者家族34名、子ども9名】
- (4) 講演者： 6名【川島亜紀子准教授(山梨大学)、高島響子研究員(国立国際医療研究センター)、ダウン症候群のある子どもの父親4名(幼児期2名、学童期1名、成人期1名)】
- (5) 内容： 当日は上記のように幅広い背景をもつ参加者が集まり、大学本館306室が概ね満席となった。お茶の水女子大学三宅秀彦先生による開会の挨拶の後、はじめに報告者が生命科学からみた父親・母親について、シンポジウムの企画に至った自身の研究について、説明を行った。生命科学からみた父親・母親に関しては、遺伝情報である染色体、DNA、また出生前検査やダウン症候群のことを含む話とし、講演者の話を聞く上での基礎知識が得られるように心がけた。シンポジウムは、専門家による第一部と父親による第二部の二部構成とした。第一部前半は、高島響子先生より「生命倫理学からみた父親・母親」というタイトルで、代理出産

やミトコンドリア病などの近年の医療に関連した父親・母親についての情報提供が行われた。第一部後半は、川島亜紀子先生より、「夫婦葛藤の心理学」に関して、先生自身のこれまでの研究で得られた知見を含めて、夫婦という視点からの父親・母親についてのお話があった。これら2名の専門家の講演から、父親と母親についての理解を深め、第二部に移行した。

第二部は、ダウン症候群のある子どもの父親の講演と、パネルディスカッションを行った。父親は、出生前検査でダウン症候群と診断された幼児期の子どもの父親、特別養子縁組した幼児期の子どもの父親、兄弟のいる学童期の子どもの父親、「ダウン症のイケメンタレント」である成人期の子どもの父親の4名とした。診断された時の気持ちや、これまでの状況、自身の経験や考えなどが、子どもの写真の映像とともに語られた。診断された時の自分の差別的な感覚に気づいたこと、その後考えが変わっていった話や、特別養子縁組に至った状況、そして子どもの成長を感じた出来事などこれまでにあまり聞くことができなかった貴重な話を聞くことができた。その後、参加者からの質問を中心としたパネルディスカッションを行い、父親の職場での状況、思春期の父親の役割、医療者に求めることなどの各質問に対する回答を得るとともに、最後に父親全員がシンポジウムのタイトルとなる子育てについてのメッセージを提供した。

シンポジウム終了後、シンポジウムに関するアンケートに回答してもらい、回収を行った。



(6-1-5 図1) 当日の様子、生命科学からみた父親・母親の中のDNAの説明、講演者の集合写真

1-3. 本支援により得られた成果・効果

本支援によりシンポジウムを企画・運営できたことは、今後の研究活動を行う上で貴重な経験となった。女性リーダーにとって、シンポジウムを企画し運営する能力は欠かすことができないと考えられる。プログラム作り、講演者の選定と依頼、申込者の受け付け、会場の設営、当日の進行など、一連の流れ全てを遂行したことで、シンポジウムを企画・運営する際の重要な点や今後の課題等を明確にすることができた。

本シンポジウムの参加者は128名であり、幅広い背景をもっていた。専門家による第一部と父親による第二部の二部構成にしたことで、幅広い人に参加してもらえた可能性がある。終了後のアンケートの結果からは、「第一部と第二部の構成でよかった」「専門家と父親の両方の話

が聞いてよかった」等のコメントがみられた。また、多くの人に参加してもらえたことは、遺伝性疾患を有する子どもの父親についての情報は必要とされており、今後の研究においても、母親だけでなく父親に関する知見も提供していくことが重要であることが確認できたと考えている。今回、シンポジウムに参加した複数の当事者父親から、今後の研究協力の可能性についての承諾を得ることができたため、本シンポジウムは、今後の研究にもつながる貴重な機会となったと言える。

アンケートでは「父親の意見を聞く機会が少ないので、父親の意見が聞けたのが有意義だった」「父になる過程を語ってもらえた」「母親とは違った愛し方をしていることを知ることができた」等、父親についての理解が深まったことを示すコメントが複数みられており、本シンポジウムの目的でもあった父親についての理解を参加者に促したことが示唆される。さらに、今回一般や学生の人も複数参加しており、アンケートにおいて、ダウン症候群について「これまで目をそらしてきたけれども、とても可愛いと思った」「知識がないことは一番良くないと感じた」「ダウン症のかたと関わることが普段ないので、自分の知らなかったことを知ることができた」という遺伝性疾患に関する知識の向上やスティグマの軽減につながったことを示すコメントがみられており、本シンポジウムが、社会教育としての効果をもたらしたことも予測される。

上記は、アンケートの結果に基づいたシンポジウムの効果を挙げたが、アンケートには、課題についてのコメントもみられ、今後の開催にあたっての考慮点も得ることができた。「父親をテーマにしたシンポジウムを継続して行ってほしい」という意見が複数あったため、今回のシンポジウムから明らかになった課題を検討し、より焦点を絞ったテーマで、父親の理解を促進するためのシンポジウムを今後も開催していきたいと考えている。アンケートでは、多くの貴重な意見が得られたため、分析結果は遺伝カウンセリング学会等の発表により還元することを予定している。

公開シンポジウム
子どもへの親になること
 ダウン症のある子どもの父親から
 ～子育てに関するメッセージ～

日時 2018年12月22日(土)
 13:00～17:00(開場 12:30～)

会場 お茶の水女子大学 大学本館
 3階306室

参加 無料

お申し込みはこちらから
<https://wa.formzila.net/jgen/S35998830/>

第一部 父親と母親の違いってなに?～専門家の視点から～
 生命倫理学からみた父親・母親
 国立国際医療研究センター上級研究員 高島智子先生
 夫婦関係の心理学
 山梨大学准教授・臨床心理士 川島聖紀先生

第二部 父親ってなに?～ダウン症のある子どもの父親の視点から～
 出生前診断でわかったお父さん、ご兄弟のいるお父さんのお父さん、ダウン症のイクメンarentあひけ太さんのお父さん、特別養子縁組されたお父さんの4名にお話しいただきます! 幼児期、学童期、成人期のお子さんのお父様です。

パネルディスカッション
 ダウン症のあるお父さんのお父様のために「ネリスト」になっていただき「父親」について話し合いとします。お茶の水女子大学遺伝カウンセリング領域の三宅秀彦教授(臨床遺伝専門医)からもコメントをいただきます。

(6-1-5 図2) 「若手女性研究者支援」チラシ1

2. 『継承』の比較史 ―伝えられるモノと文化―

報告者: 巽昌子氏

2-1. 目的・意義

日本中世史、ロシア近世史、日本説話文学、日本服飾史と異なる領域の研究者とともに研究会・シンポジウムを開催し、それぞれの専門分野の観点から「継承」の“あり得る姿”を提示する。それを基に「継承」の本質を探究し、来年度以降の共同研究の基盤形成を目指す。

2-2. 実施内容

背景

申請者はこれまで、日本中世の公家社会と寺院社会における相続の研究に取り組んできた。その研究を進める中で、社会ごとに「継承」の在り方が異なる点に注目した比較研究の必要性が高まったことから、日本中世史、ロシア近世史、日本説話文学、日本服飾史の研究者との研究集会およびシンポジウムの開催を企画した。

事前準備

2018年12月と2019年1月に、シンポジウムに向けた研究集会を実施した。安田次郎本学名誉教授はじめ、登壇者以外の研究者を3名加え、それぞれの専門分野における研究手法の説明を行ったのち、シンポジウムの趣旨確認および報告内容の精査に取り組んだ。一連の研究集会を通じて、報告では専門用語を極力用いないこと、レジュメには基本事項を補足する資料を添付することなど、様々な領域の研究者や一般の方を対象に報告を行う上での注意点を洗い出した。このほか各々の報告内容がシンポジウム全体の趣旨に適うものになっているか否かの確認など、メール等で随時打ち合わせを行い、シンポジウム当日に備えた。

シンポジウム当日

2019年2月16日(土)に文教育学部1号館302室にて公開シンポジウム『「継承」の比較史—伝えられるモノと文化—』を開催した。登壇者は鈴木佑梨氏(ロシア近世史)、巽昌子(申請者、日本中世史)、内田澪子氏(日本説話文学)、山岸裕美子氏(日本服飾史)(報告順、所属・職位は6-1-5 図4のポスターに記載)であり、司会・進行は大藪海本学助教にお引き受けいただいた。

シンポジウムは、主催である申請者がはじめに趣旨説明を行い、その後登壇者4名が報告を行って、それぞれの学問領域における「継承」の“あり得る姿”を提示した。

具体的には、鈴木氏の報告では北方戦争におけるロシアの対デンマーク外交を通して、一般的に「継承」という概念では捉えられることのない国家外交の中に「継承」を見出そうとする試みが示された。巽の報告では寺院社会において財産や教義、法流といったものを「継承」する際に用いられる文書を題材に、①その文書に記された「継承」の内容と、②その文書自体の「継承」のされ方という、二重の「継承」に関する考察を行った。内田氏の報告では、長谷寺にまつわる縁起を収集し、内容から分類することによって、それらの言説がそれぞれ何を「継承」しようとしたものなのか、また、「継承」しようとした主体についても明らかにし得ることが提示された。山岸氏の報告では鎌倉時代を中心に、中世の武家が用いた服飾の変化に関して盤領(あげくび)仕立てと垂領(たりくび)仕立てとに区分しながら、各服飾における「装い」の意識の変化に検討を加え、武家が築いた服飾文化の「継承」を捉えた。報告ごとに質疑応答の時間を設けたところ、専門を異にする研究者や学生から、自身の研究分野と比較する形での質問が多くなされ、それらの指摘は後の討論の内容をより深めるものとなった。

各報告に続いてそれらの内容を基にした、「継承」の本質を探る討論を行った。登壇者のみならず来場者も交えての討議がなされ、予定時刻を30分以上超えての白熱したものとなった。ここでは総括として、『「継承」』とは、社会的意義・目的がないとなされない極めて人為的なものであり、イエ・社会・身分などの何らかの枠組みが存在しないと成立し得ないことから、人間やイエといったものが、自らの存在意義・アイデンティティを固持するためになされるものと捉えられるのではないかと、

といった見解が示された。



(6-1-5 図3) 当日の様子



(6-1-5 図4) 「若手女性研究者支援」チラシ 2

2-3. 本支援により得られた成果・効果

成果・効果

今回は公開シンポジウムのため、事前準備としてホームページへの掲載や学内メールの配信に加え、ポスターやチラシを本学学生のほかに学外研究機関にも広く配布して参加者を募った。その結果、春季休業中ということもあり全体の参加者数は 25 名前後と小規模であったが、参加者には本学教員・研究員・大学院生・学部生のみならず、東京大学史料編纂所など学外の研究機関の教員や一般の方も含まれ、幅広い層を対象とするとの目標は達成された。

また、当日はアンケートを配布し、本シンポジウムを知ったきっかけや満足度、報告・討議の時間配分やテーマ設定に関する意見、シンポジウム全体に関する意見・感想を調査した。その結果、本シンポジウムを知った契機としてはポスター・チラシが最も多く、次いで学内通知メール・知人の紹介となっており、助成金を基に印刷したチラシの配布が大きな効果を上げたことが判明した。また、満足度や時間配分、テーマ設定に関しては全体として高評価であり、その理由としては「専門外の内容について学ぶことができた」との点が多く挙げられ、特に「それぞれの報告が専門的な内容でありながらも、初心者でも分かり易く聞くことができた」という点が評価された。シンポジウム全体に対しては、学生・一般の方からは「分野を異にする研究者による報告・討議を通して、大学で学ぶことの意義を実感できた」という感想が、学内外の研究者からは「和やかな雰囲気の下、あらゆる時代や地域、学問分野といった枠組みを越えての深い意見交換を行うことができ、有意義な会であった」との意見が寄せられた。

自身の研究力向上

本プロジェクトによる研究集会やシンポジウムの企画・運営の経験は、今後所属する学会等の運営に携わるようになった際に大いに生きるものと推察される。

また「継承」というテーマが非常に幅広く展開するものであることを受けて、来年度以降も申請者を中心に研究会を継続することになった。その際にはシンポジウムに参加した博物館学の研究者も新たに招き、博物館学における「現状維持を第一義とする『継承』」と、服飾などにみられる「変化を遂げながらも『継承』されていくもの」との比較を試みたく考えている。

以上のことから、本企画を通じ、専門分野を異とする研究者との共同研究の基盤を築くという目的は十分に達成されたといえる。来年度以降の研究会を経て、科研費の獲得など、一層自身の研究の発展につながる成果にも結び付けていく所存である。

6-1-6 研究職への進路選択を促すインターンシップの実施

グローバルリーダーシップ研究所 特任講師 内藤 章江

本学の理系分野の学部生・大学院生を対象に、材料科学分野で世界トップレベルの物質・材料研究機構(以下、NIMSと表記)へ夏期休業中の2-3週間程度インターンシップ生として派遣し、研究開発の最先端を体感させる「NIMS インターンシップ」を実施した。NIMSでのインターンシップを希望する学生を学内公募し、学内審査を経て派遣する学生を選出した。インターンシップ生として採択された学生には、本学もしくはNIMSからインターンシップ期間中の経費(宿泊費・交通費)を支援した。

これまで、2015年度に11名、2016年度に9名、2017年度に5名の学部生、大学院生をNIMSインターンシップ生として派遣した。2018年度は6-1-6表1に示す2名をインターンシップ生として派遣した。なお、2名のうち1名はNIMSからの経費支援を受け、1名は本学からの経費支援を受けてインターンシップを実施した。

(6-1-6表1) 2018年度NIMSインターンシップ採択者

	氏名 (所属・学年)	期間	所属機関におけるスーパーバイザー
		受入研究者(所属部門・ユニット)	
		研修の課題	
1.	高張真美 (理学部化学科3年)	2018/8/20-8/30	棚谷綾 御手洗容子(構造材料研究拠点 耐熱材料設計グループ) 形状記憶合金の特性を調べる。
2.	福島真夏 (理学部生物学科3年)	2018/8/27-9/14	近藤るみ 花方信孝(機能性材料研究拠点 バイオ機能分野 ナノメディスングループ) RT-PCR、qPCR 実験、共焦点レーザー顕微鏡を用いた免疫染色法による形態的観察の見学。培養細胞を用いた材料の評価。